九州大学伊都キャンパスのパブリックスペース創造

坂井 猛／有川 節夫
Written by Takeru Sakai and Setsuo Arikawa

九州大学は、1911年創設以来の大改革による新しい時代の大学像を全国に先駆けて実現するため、福岡市西部の糸島半島に新天地を求めた。伊都キャンパスは、福岡の都心から車で30分の距離にありながら、水と緑が豊かな自然環境の中にある。九州大学では新キャンパス計画専門委員会を組織し、地盤、水工、生態、交通、都市、建築、考古学などの学内外の専門家により構成するワーキンググループによって、用地の分析と計画の検討を行ってきた。2001年に策定した「新キャンパス・マスタープラン2001」では、博多湾、福岡市街地、背振山系と田園などの遠景要素への眺望を積極的に活かし、緑地の保全に配慮しつつ、社会に開かれたキャンパスを創り出すための方針を示した。さらに、マスタープランの理念を実施ベースに反映させ、パブリックスペースにおけるクオリティの確保をはかるため、2004年に「パブリックスペース・デザインマニュアル」を策定し、ランドスケープ、植栽、サイン、光環境、アート、ファニチャー、色彩、素材などに関するデザインの方向性と手法を示した。

1.ランドスケープと植栽

①地域の風土・ランドスケープとの調和、②自然との多様な接点の創出、③大学生活の「場」にふさわしい創造性を誘発する空間の創出、という3つのコンセプトに沿って、大学の「風格」を表す重要な要素とする。

2.サインと光環境

①情報拠点への的確な配置、②現在位置のわかりやすさ、③通り名称の活用、④照明とサインの一体的整備、⑤変化への対応など、大学にふさわしい提案を織り込んだサインを整備する。また、「防犯性」や「安全性」などの役割をもつ機能照明に加え、演出照明によって「話題性」、「ランドマーク性」を確立する。さらに、自然や植物の生態系を守るために人工光が漏れないよう配慮している。

3.アートとファニチャー

「美しさ」や「うるおい」そして「象徴性」をもたらすとともに、「感性」を刺激し、大学のアイデンティティを高めるうえで重要なアートワークは、評価・選定ワーキンググループによる選定・公募などを行う。

4.色彩と素材

飽きのこない、周辺景観を活かす色彩環境を形成し、構成要素間の調和に配慮し、大学で新たに規定されたシンボルカラーを効果的に活用するとともに、旧キャンパスの色彩イメージの活用をはかる。

マニュアルの運用にあたっては、新キャンパス計画専門委員会の各ワーキンググループ、新キャンパス計画推進室、施設部及び学部などの事務局の連携により、予算の状況に従って一歩一歩進めつつある。現在、全学教育施設などを建設中であり、2009年には約1.2万人が集うキャンパスとなる予定である。

坂井 猛
（さかい・たける）
九州大学新キャンパス計画推進室副室長・教授、建築学、都市計画学

有川 節夫
（ありかわ・せつお）
九州大学理事・副学長、新キャンパス計画推進室長、情報学

事業名●九州大学新キャンパス統合移転事業
所在地●福岡市西区元岡七四四
用　途●大学
事業主●九州大学
設　計●マスタープラン二〇〇一（九州大学新キャンパス計画専門委員会＋MCM設計共同体）
パブリックスペース・デザインマニュアル●九州大学新キャンパス計画専門委員会（WG長佐藤優教授）＋㈱空間創研
工学系研究教育棟●MCM設計共同体、㈱REO元岡、九州大学施設部
施工、土地造成●福岡市土地開発公社、工学系研究教育棟（清水・奥村・松本JV、鴻池・青木・植村JV、㈱REO元岡
面　積●一七五ha
工　期●造成工事／二〇〇六年六月
工学系研究教育棟建築工事／二〇〇三年一月～二〇〇六年五月
交　通●JR「九大学研都市」駅よりバス一三分